

## 第6節 光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査

1. 教育学部附属光中学校改修工事に伴う本発掘調査・立会調査

**調査地区** 光構内附属中学校玄関北東側  
**調査面積** 約108㎡(本発掘調査:A調査区約30.0㎡、B調査区約30.4㎡、C調査区35.8㎡、立会調査:D調査区11.8㎡)  
**調査期間** 本発掘調査 平成21年5月18日～6月4日  
 立会調査 平成21年12月11日

**調査担当** 田畑 直彦

### 調査結果

(1) 調査の経緯(図66、写真141)

平成20年度補正予算措置で教育学部附属光中学校校舎の改修工事が決定したことに伴い、中学校校舎玄関周囲において、身障者用エレベーター、屋外階段、排水設備の改修、スロープ設置工事が計画された。

工事予定地の南東に位置する中学校体育館敷地<sup>註1</sup>周辺では、縄文土器～中世(室町時代)の遺物を含む遺物包含層が検出されている。また、附属小学校校舎<sup>註2</sup>周辺・運動場<sup>註3</sup>においても、古墳時代・近世後半～近代のピット群、土壌等の遺構が検出されていることから、今回の工事予定地においても、埋蔵文化財が遺存する可能性が十分に考えられた。以上の状況を踏まえ、平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会(3月18日開催)において、当該工事における埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、身障者用エレベーター・屋外階段予定地(A・B調査区)、スロープ予定地(C調査区)については本発掘調査、排水設備部分(D調査区)については、立会調査を実施することになった。

(2) A・B調査区

エレベーター・屋外階段新設予定地である。光構内では砂層・砂質土上に遺構が存在する関係上、調査時に壁面が崩落する恐れがあることから、図67の南西部:A調査区、北東部:B調査区に分割して調査を行った。なお、本報告にあたり、遺構は通し番号を付け直している。

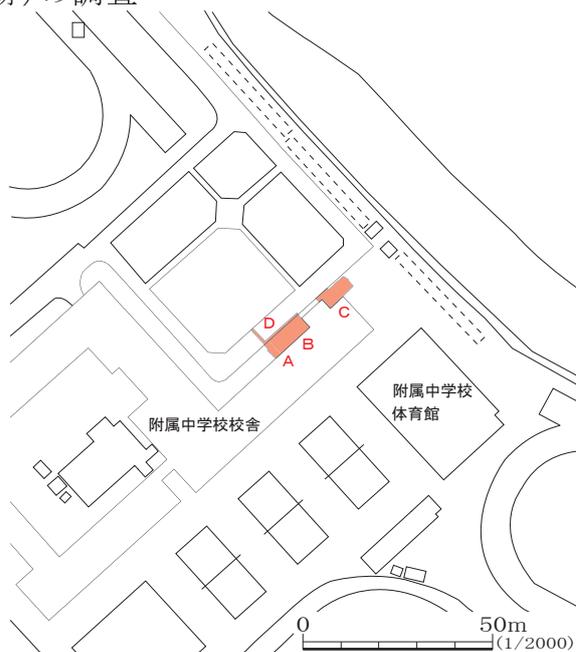


図66 調査区位置図



写真141 調査前全景(南西から)



写真142 A・B調査区設定状況(南西から)

**a.基本層序(図67、写真143・144・146・147)**

A・B調査区の基本層序は下記の通りである。

- 第1層 表土(層厚約10cm)
- 第2層 造成土(層厚約30～40cm)
- 第3層 灰黄色(2.5Y7/2)粗砂(層厚約5～20cm)
- 第4層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂・暗オリーブ色(5Y4/3)粗砂(層厚約5～20約cm)
- 第5層 オリーブ黄色(5Y6/4)粗砂(層厚約2～10cm)
- 第6層 黒褐色(10YR3/2)粗砂(層厚約5～10cm)
- 第7層 遺構面検出層(層厚約25～55cm以上)
  - 7-1・4層 黄褐色(10YR5/6)粗砂
  - 7-2層 灰オリーブ色(5Y5/3)粗砂
  - 7-3層 黄褐色(10Y5/6)粗砂・灰オリーブ色(5Y5/3)粗砂・黒褐色(7.5YR3/2)・明黄褐色(2.5Y7/6)、暗オリーブ色(5Y4/3)粗砂、細砂の互層
- 第8層 黒褐色(2.5Y3/2)礫

調査区北東部・南東部は既設校舎の建設に伴う攪乱を受けているため、基本層序が確認できたのは北西壁面のみで、校舎縁辺では第2層直下で第7層を検出した。また、北西壁面においても、道路舗装に伴い現地表面下約20cmまでは造成土・コンクリート基礎となっていた。以下では北西壁の状況を中心に報告する。

第3層、第4層は調査区全域で確認された。いずれもB調査区北東部において若干緩やかに下降するものの、ほぼ水平に堆積する。遺物は出土していないが、近～現代の整地層・遺構面である可能性が高い。第5層・第6層はB調査区のみで検出され、北部において下降している。遺物は出土していない。第7層は遺構面検出層である。また、摩滅した土器片が少量出土したが、時期が確定できるものはなかった。調査区北東部・南西部では第7-1・4層：黄褐色(10YR5/6)粗砂が検出され、上面から多数の遺構を検出した。断面では確認できなかったが、両層は同一層である可能性がある。また、第7-4層はB調査区北部から下降している。遺構との前後関係は不明であるが、浸食作用により削平されたものと考えられる。第7-1・4層間では第7-2・3層が堆積しており、第7-2層上面ではSK2、第7-3層上面ではPit33、35が検出された。第8層はA調査区北東部で確認した。第7-2・4層の直下に堆積する。ややしまりのある礫層で遺物は出土していない。

**b.遺構(図67・68・写真148・149・151～156・表9)**



写真143 A調査区北西壁土層断面(南から)



写真144 B調査区北西壁土層断面(南から)

第7層上面からはピット42基、土壙3基が検出された。以下では平面形が円・楕円形で一辺が100cm以下のものをピット、100cm以上のものを土壙として報告する。

ピットは規模・配置ともにばらつきが大きく、掘立柱建物を復元するには至っていない。また、Pit25のように深さが60cmを越えるものもみられるが、深さが20cmを越えるピットは11基しかないことから、半数以上のピットについては柱穴の機能を有していたかどうかを含め、不明な点が多い。また、一部のピットからは土師器片が出土したが、小片で摩滅したものが多く、時期の特定はできない。

土壙のうち、SK1は両端に柱穴状の落ち込みがみられる。土層断面では確認できなかったが、2基のピットが切り合ったものである可能性がある。SK2は平面形が不整形、SK3は平面形が楕円形を呈し、断面形はすり鉢状を呈する。SK1・3からは土師器片、SK2からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵

表9 遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
ピット	Pit1	楕円形	29×46	10.0	土師器片		
	Pit2	楕円形	30×53	27.3			
	Pit3	楕円形	22×25	15.3			
	Pit4	円形	径8	10.7			
	Pit5	楕円形	20×26	10.7			
	Pit6	楕円形	40×59	18.1			2段Pit
	Pit7	楕円形	44×48	10.2			
	Pit8	楕円形	33×36	23.8			
	Pit9	楕円形	19×27	16.7			
	Pit10	楕円形	20×28	15.7			2段Pit
	Pit11	楕円形	12×15	12.9			
	Pit12	楕円形	14×19	34.8			
	Pit13	楕円形	15×20	27.5			
	Pit14	楕円形	32×71	12.3			
	Pit15	楕円形	21×26	10.8			
	Pit16	円形	径12	6.1			
	Pit17	楕円形	35×58	26.9			
	Pit18	円形	径14	12.0			
	Pit19	円形	径18	7.7			
	Pit20	楕円形	31×45	14.3			
	Pit21	楕円形	13×22	10.7			
	Pit22	楕円形	19×25	32.2			
	Pit23	円形	径20	15.4			
	Pit24	楕円形	42×53	19.3	土師器片		
	Pit25	楕円形	24×41	68.2	土師器片		
	Pit26	楕円形	13×19	15.6			
	Pit27	円形	径11	12.4			
	Pit28	円形	径10	20.0			
	Pit29	楕円形	10×12	15.1			
	Pit30	楕円形	14×17	22.0			
	Pit31	楕円形	30×33	6.0			
	Pit32	楕円形	12×17	17.1			
	Pit33	楕円形	55×64	8.8			2段Pit
	Pit34	楕円形	34×44	13.0	土師器片		
	Pit35	楕円形	21×29	32.7	土師器片		
	Pit36	楕円形	41×43	9.4			
	Pit37	楕円形	20×25	14.6	土師器片		
	Pit38	楕円形	29×30	7.8			
	Pit39	不整形	33×56	9.7	土師器片		
	Pit40	楕円形	47×55	17.0	土師器片		SK2を切る
	Pit41	楕円形か	37×不明	47.8	土師器片		
	Pit42	楕円形	46×79	45.1			
土壙	SK1	不整形	54×110	42.0	土師器片		2基のPitが切り合ったものか
	SK2	不整形	112×不明	30.5	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器片		Pit40に切られる
	SK3	楕円形か	105×不明	13.7	土師器片		

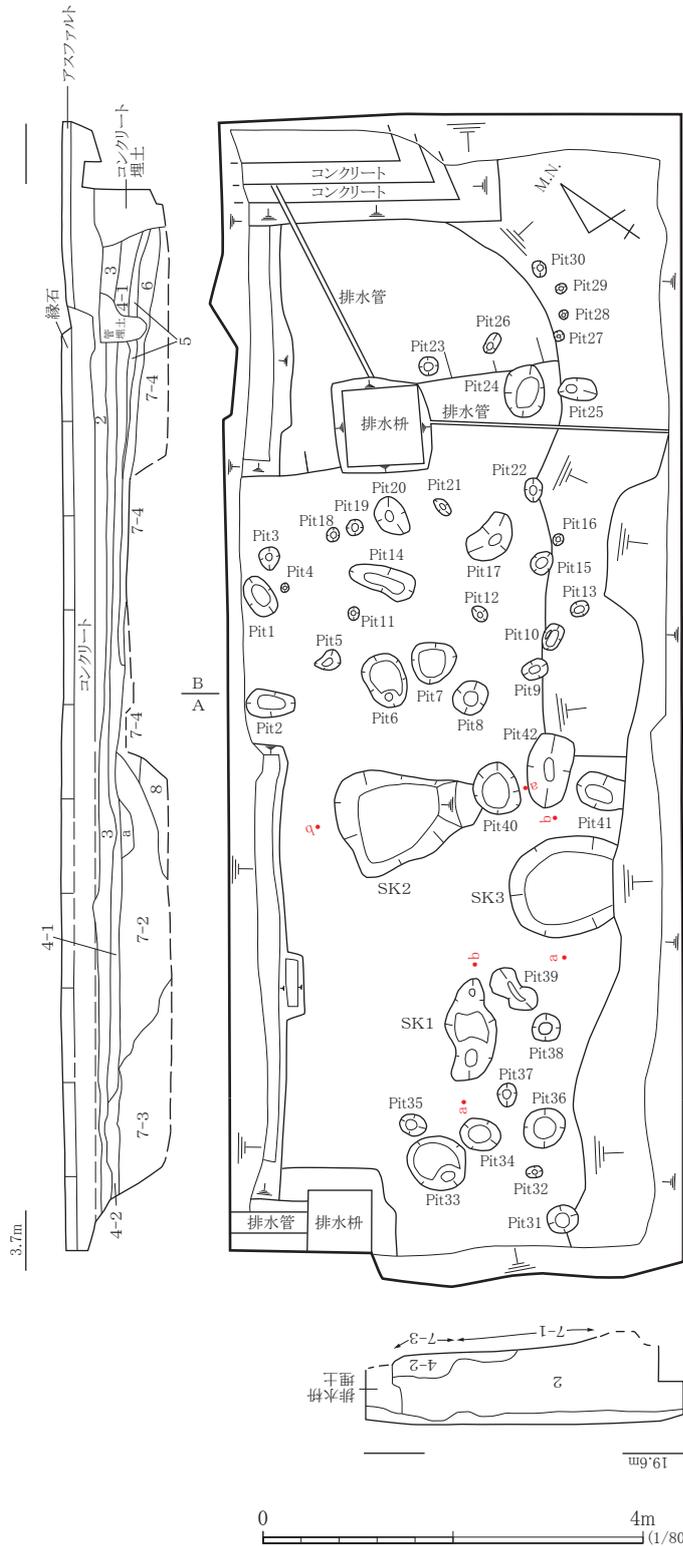
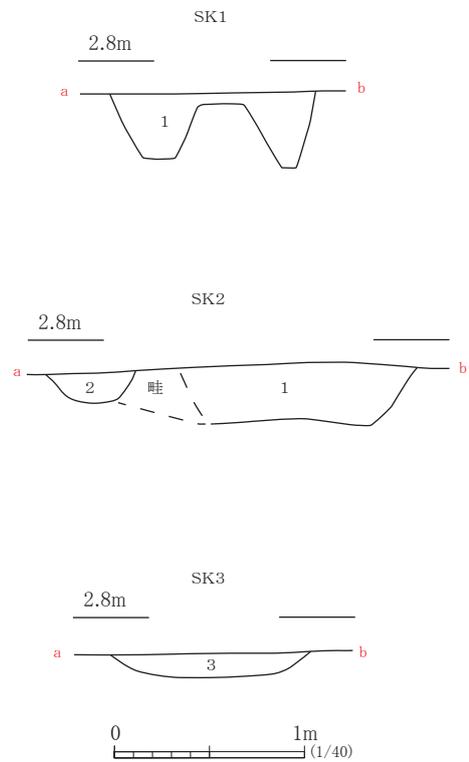


図 67 A・B調査区平面図・断面図

- 1 表土
- 2 造成土 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粗砂 瓦礫を含む
- 3 灰黄色 (2.5Y7/2) 粗砂
- 4-1 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂
- 4-2 暗オリーブ色 (5Y4/3) 粗砂 0.5～3cm大の礫を含む
- 5 オリーブ黄色 (5Y6/4) 粗砂 0.5～2cm大の礫を含む
- 6 黒褐色 (7.5YR3/2) 粗砂
- 7-1 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂
- 7-2 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粗砂 0.5～3cm大の礫を少量含む
- 7-3 黒褐色 (7.5YR3/2)、明黄褐色 (2.5Y7/6) 暗オリーブ色 (5Y4/3) 粗砂・細砂の互層
- 7-4 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂 7-1と同一層か
- 8 黒褐色 (2.5Y3/2) 礫 1～3cm大の礫主体
- a 遺構埋土か、灰オリーブ色 (5Y5/3) 粗砂 1～3cm大礫を多く含む



- 1 黒褐色 (2.5Y3/1) 粗砂、暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗砂のブロック砂 0.5～3cm大の礫を含む
- 2 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗砂
- 3 褐灰色 (10YR6/1) 礫 1～3cm大の礫主体

図 68 SK 1～3 土層断面図

器片が出土したが、いずれも小片であり、時期を特定することは困難である。

c.遺物(図69、写真145)

遺構から、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器片が出土している。このほか、遺構検出時に縄文土

器、土師器、須恵器、近世～近代の陶磁器片が出土した。

1はA調査区SK1北西側の第7-2層上面で出土した須恵器甕口縁～胴部片で、胴部には格子目叩きがみられる。復元口径16.2cm。2は遺構検出時に出土した須恵器坏身口縁～胴部片である。胴部下半に回転ヘラ削りを施す。

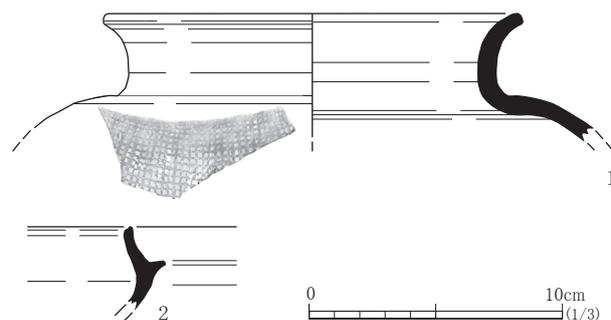


図 69 出土遺物実測図

(3) C調査区(写真157・158)

C調査区はスロープ設置箇所である。全体を現地地表下約60cm、さらに北東壁沿いでは約140cmまで掘削を行ったが、造成土・近代以降の堆積層を確認するにとどまった。

(4) D調査区(写真159)

D調査区は排水管新設箇所である。現地地表下53cmの褐色(10YR4/4)粗砂上面から掘り込まれたピット2基を断面で確認したが、遺物は出土しなかった。

(5) 小結

今回の調査の結果、A・B・D調査区で遺構面を確認した。注目されるのは構内中心部で最も海岸寄りで遺構が検出されたことである。このうち、A・B調査区で検出された遺構の時期については出土遺物が僅少であるため定かではないが、確実に古代以降に位置づけられる土器が出土していない点や遺構検出時に須恵器が出土していることから、附属小学校校舎周辺・運動場で確認された古墳時代後期の遺構面に対応する可能性が高い。遺構の性格等については不明な点が多いが、附属中学校体育館周辺で検出されている遺物包含層との関連も注目されよう。また、B調査区北部以北は遺構面が侵食作用によって削平されていたとみられる。B調査区の約20m北側に位置するC調査区北部では、現地地表下約140cmまで掘削を行ったにも関わらず、遺構面及び遺物包含層を検出することができなかった。以上、今回の調査により、御手洗遺跡の状況を知る上で重要なデータを得ることができた。



写真 145 出土遺物

【註】

1) 福本幸夫(1966)「II 光市における先原史時代の遺跡」,福本幸夫(編)『先原史時代の光市』,光(山口)

横山成己(2005)「付篇 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成15年度-』,山口

2) 横山成己(2005)「第1章第6節 教育学部附属光小学校エレベーター昇降路他新設に伴う試掘・立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成15年度-』,山口

3) 河村吉行(1992)「第3章 光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』,山口

表10 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物 番号	遺構 層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
				①口径②底径③器高	①外面 ②内面				
1	第7-2層 上面	須恵器 甕	口縁～ 胴部	①(16.2)		①②灰白色(7.5Y4/1)		精良	
2	遺構 検出時	須恵器 坏身	口縁～ 胴部			①②にぶい黄色(2.5Y6/2)		精良	



写真146 A調査区南西壁土層断面(北東から)



写真147 B調査区北部北西壁土層断面(南東から)



写真148 A調査区遺構検出状況(南東から)



写真149 A調査区遺構完掘状況(南東から)



写真150 A調査区須恵器出土状況(南西から)



写真151 A調査区SK 1土層断面(南東から)



写真152 A調査区SK 2・Pit40土層断面(北東から)



写真153 A調査区SK 3土層断面(南東から)



写真154 B調査区遺構状況(南東から)



写真155 B調査区完掘状況(南東から)



写真156 B調査区Pit25半截状況(北東から)



写真157 C調査区全景(北東から)



写真158 C調査区北東壁土層断面(南西から)



写真159 D調査区土層断面(南西から)

## 2. 教育学部附属光中学校校舎改修工事(プレハブ建設)に伴う立会調査

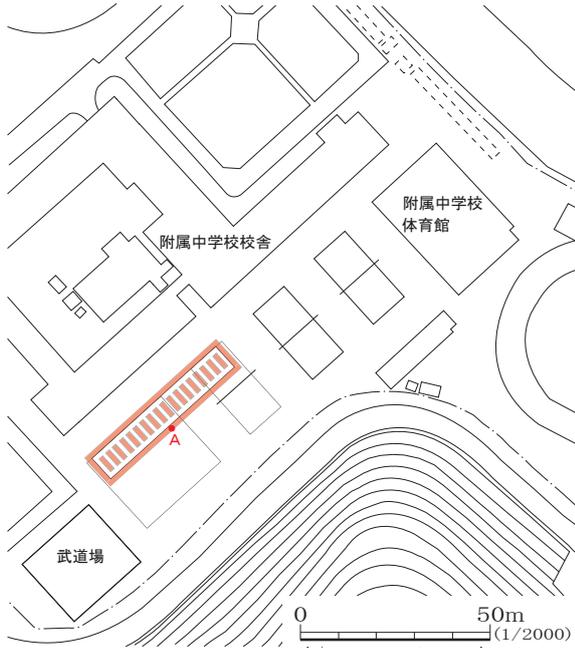


図70 調査区位置図

調査地区 光構内

調査面積 約245㎡

調査期間 平成21年6月18日

調査担当 田畑直彦

調査結果 前項で報告した教委教育学部附属光中学校改修工事に伴い、附属中学校テニスコートにおいて仮設校舎の建設工事が決定した。調査区南西側においては、平成5年度に実施された附属光中学校武道場新営その他工事<sup>註1</sup>に伴う立会調査において、現地表下約30cmから遺物包含層と考えられる黒褐色砂が検出され、近世陶磁器の小片が出土している。このため、当該工事計画を担当する施設環境部と事前調整を行い、掘削深度が最大でも現地表下約20cmにおさまる工法で施工し、立会調査を実施することとなった。

工事では約10m×47mの範囲内の建物基礎部について、現地表下約10～20cmまで掘削が行われたが、表土(マサ土)の範囲であり、底面で旧表土と考えられる黄褐色(2.5Y5/6)粗砂及び明黄褐色(2.5Y6/6)粗砂を検出するにとどまった。

テニスコートにおける地下の状況は不明であるが、武道場敷地<sup>註2</sup>では中世の柱穴等の遺構、附属中学校体育館敷地<sup>註3</sup>周辺では遺物包含層が検出されている状況から、遺構・遺物包含層が分布する可能性が極めて高く、今後とも埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

### 【註】

- 1) 豆谷和之(1995)「第3章第3節 附属光中学校武道場新営その他工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅢ』,山口
- 2) 豆谷和之・田崎美佐(1994)「第3章 光構内教育学部附属中学校武道館新営工事に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅢ』,山口



写真160 調査区全景(南東から)



写真161 A地点断面(北東から)

3) 福本幸夫(1966)「Ⅱ光市における先原史時代の遺跡」,福本幸夫(編)『先原史時代の光市』,光(山口)

横山成己(2005)「付篇 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成15年度-』